

フッサールとデリダにおける時間論

竹 原 弘

はじめに

20世紀初頭の哲学者であり、20世紀の哲学の流れを大きく支配した現象学の創始者であるフッサールと、現在まだ活躍しているフランスの、脱構築の哲学者ジャック・デリダという組合せは、一見奇妙に思われるかも知れない。確かに両者の思想は限りなく隔たっている。一方は、いわば主観主義の哲学の構築者であり、人間主体からのみ世界を見ようと試みた哲学者であり、その考えはハイデッガーやサルトル、メルロ＝ポンティなどに受け継がれ、また実存哲学と結び付いたりした。後者は、構造主義の後に位置し、いわばポスト構造主義の哲学者であり、人間主体を超えた記号の戯れを論ずる哲学者である。このように両者の考えには共通点は無いように思われるが、しかし、デリダが独自の哲学を構築したのは、フッサール批判を通してである。特に初期の『声と現象 (La voix et le phénomène)』におけるフッサールの時間論批判において、デリダは彼独自の差延 (la différence) という考えを作り上げた。したがって、両者の間には関係はないことはない。いわば、両者は時間についての考え方において結び付いているとってよいのではないだろうか。本稿では、まずフッサールの時間論を述べ、そしてデリダのフッサール批判を媒介にした彼独自の時間論について述べる。全体の構成は次の通りである。

(1 - 1) - (1 - 4) = フッサールの時間論。(2 - 1) - (2 - 3) = デリダの時間論。(3) = まとめ

(1-1)

フッサールにとって、世界を経験する主体としての自我の構造を考察するのが問題である。われわれは日常的には、われわれの経験にとって最も確実なものであり、その存在が自明のものである世界の存在を素朴に信じている。われわれが日常的に出会う様々な存在者は、世界という絶対的に確実な地平において自らを提示する。諸々の存在者がそこにおいて自らの在り方を提示する地平としての世界を素朴に定立し、そのことに基づいて一切の活動を為す態度を、フッサールは「自然的態度 (natürliche Einstellung)」という。そうした素朴な自然的態度を反省して、世界について経験する自我と世界との関連性について反省すること、すなわち、世界の存在を、世界について経験する自我の能作において捉え直すことを、フッサールは「現象学的還元 (die phänomenologischen Reduktion)」という。現象学的還元とは、世界を経験する自我についての徹底した反省にほかならず、したがって、自我の、世界を経験する、その作用の構造を掘り起こすことにほかならない。すなわち、自我は、世界を経験する生としての己れを、世界を己れの内に巻き込んだものとして、あるいは世界を意識の能作の相関者として捉えなければならない。

そして、世界を経験する生としての自我の構造分析は、時間的な側面から為されなければならない。フッサールの自我の能作の時間的分析は、晩年になってくるにつれてその比重を増してゆく。結局、自我は、自我にとって超越的なもの (das Transzendente) を自らに告知する仕方を知覚であるとし、知覚において、超越的なものとの出会いが可能になるのである。すなわち、自我による所与の根源的な受容は、感覚的知覚であり、そこにおいて自我と世界との出会いが有るといえる。志向的根源性としての知覚が、知覚的所与を明白性において捉えることができるのは、「現在 (Gegenwart)」において捉えるからである。したがって、「知覚することは、『現在化すること (Gegenwärtigen)』として適切に特徴付けることができる。」¹⁾つまり、自我

注1) Klaus Held : *Lebendige Gegenwart*, Martinus Nijhoff, Haag, 1966, S. 8.

による世界経験は、時間性としての構造を有しているのであり、したがって、世界を経験する生としての自我の能作による世界の構成、つまり、自我と世界との相関における自我の能作の捉え直しは、時間性の地平において為されなければならないのである。自我による世界の経験、そのことによる自我の能作の内に巻き込まれたものとしての世界の解明、経験的所与の解明は、時間的プロセスの中で為されるのにほかならず、したがって、フッサールにとっての、世界を経験する生の反省的捉え直しとしての現象学的還元にとって、時間的契機は重要な位置を占めるのであるといつてよい。

「しかし、知覚そのものは、そのあるがままにおいては、意識の絶えざる活動においてあり、そしてそれ自身が一つの絶えざる活動である。すなわち、絶え間なく知覚は変遷してゆき、たった今過ぎ去ったものについて意識へと引き継がれてゆき、同時に、新しい今が輝き現れる、等々。」²⁾

すなわち根源的世界経験としての知覚は、絶えざる流れであり、一瞬なりとも留まることを知らない。したがって、自我と世界との相関としての世界経験は時間的様相を呈しているのにほかならず、時間的な流れの中で、自我は世界という地平において現出する諸々の存在者を構成するのであるといえる。

フッサールの時間論において中心を占めるのは「現在」であり、「現在」こそが時間の構造にとって本質的なものにほかならない。フッサールにとって時間とは、過去から未来へと不断に流れる「無限に延びた一直線の線」のごときものではなく、現在において三つの契機が錯綜するのである。すなわち、「原印象 (Urimpression)」と「過去把持 (Retention)」と、「未来把持 (Prentention)」である。すなわち、不断に流れる意識として、それは既に過ぎ去った過去を現在において保持し、また、いまだ来たらざる未来を予知しつつ、現在において保持する中で、世界へと現前しているのである。つま

2) Edmund. Husserl : *Husserliana Bd. III, Ideen zu einer Phänomenologie und phänomenologischen Philosophie*, Martinus Nijhoff, Haag, 1950, S. 92f.

り、自我が世界を自らの、世界を経験する生へと巻き込むその仕方は、今知覚している世界についての原印象と、既に過ぎ去った過去の保持と、今だ来たらざる未来の保持という構造の中において、時間の三つの契機の錯綜としてであるといえる。すなわち、原印象、過去把持、未来把持が、現在において重層化することの中で、我々は世界を体験しているのであり、あるいは世界の諸々の現れは、この時間の三つの契機を介して為されるのであるといつてよい。

原印象とは、自我が最も直接的に経験する世界の様相であり、「持続する対象の『産出』が始まる『源泉点』が原印象である。」³⁾つまり、自我の作用が、自らの内に世界を巻き込む端緒が原印象である。しかし、原印象は、ある種の限界点、抽象化の産物にほかならず、現実的には過去把持、未来把持を伴わずに、そのみで独立して自我を構成することは有りえない。

「しかしそれ（純粹今）はまさに観念的限界でしかなく、それだけでは何ものでもありえない抽象物にすぎない。」⁴⁾

そして原印象は、「たった今有ったもの」へと変様し、自我の世界への現前の場から後退し、過去へと沈下して行く。しかし、それは現在から切り離されるのではなくて、そのように過去へと後退し、沈下することによって、保持され、現在を構成しているのである。それをフッサールは過去把持という。すなわち、自我による世界についての経験は、原印象と、その変様としての過去把持の重層化によって構成されているのである。さらに自我は今だ来たらざる未来をあらかじめ保持している。フッサールがよく引き合いに出す例を用いて説明するならば、私が音楽を聴いているときに、聴いている音楽のメロディをメロディとして把握しうるためには、たった今聴いた音を維持し、今聴いている音を原印象として保持し、そして次に聞こえるであろう音を予め保持していなければならない。すなわち、原印象、過去把持、未

3) Edmund. Husserl : *Husserliana Bd. X. Zur Phänomenologie des innern Zeitbewußtseins*, Martinus Nijhoff, Haag, 1966. S. 29.

4) *Ibid.* S. 40.

来把持が統一されたものとして、意識の中に保持されていて始めて、音の連続をある纏まりのあるメロディとして把握することができるのである。この、今だ到来していないが、次に来るであろう未来をあらかじめ把持するという自我の作用を、フッサールは未来把持と呼ぶ。そして、それは過去のある裏返しであるといえる。すなわち、「すべての記憶は、現在に至ってはじめて充実される予期志向 (Erwartungsintentionen) を含んでいる。」⁵⁾つまり、未来把持が何らかのかたちで可能であるのは、それが過去の想起に基づいているが故である。例えば、音楽を聴いている際に、次に聞こえてくるであろう音をあらかじめ把持しうるということは、その曲をかつて聴いたことがあるがゆえであり、したがって、その曲のメロディの全体像についての記憶を持っているがゆえである。あるいは、街を歩いているときに、その角を右へ曲がるとどのような光景が眼前に展開されるかを、あらかじめ未来把持しうるのは、その街について熟知しているがゆえに可能なのである。

(1-2)

したがって、現在を構成する時間意識にとって、過去把持が未来把持よりも根源的であるということができし、フッサール自身も、『内的時間意識の現象学 (*Zur Phänomenologie des inneren Zeitbewußtsein*)』において、そのほとんどの部分を過去把持の分析に割いている。それゆえに、われわれも過去把持についての分析をもう少し掘り下げて考察したい。

知覚によって与えられる原印象は、必然的に過去へと移行し、原印象の核に対する「彗星の尾」⁶⁾のごときものとして、現在野を構成する。したがって、世界経験は知覚によって与えられる原印象と、さきほどまで原印象であったものが過去へ移行したものの、現在野における保持によって為されるのである。聞こえてくるメロディが、メロディとして把握されるのは、世界経験の核としての原印象のみによっては不可能であり、たった今聴いた、そし

5) *Ibid.* S. 52.

6) *Ibid.* S. 30.

て既に過去へと移行した音の現在野における保持によって、つまり過去把持によって可能なのである。そして、その原印象も過去へと移行し、過去把持される、といったことが連続的に続いてゆくことによって、時間の移行が為されるのであるといえる。過去把持によって現在野において保持された音は、したがって現在を構成するという意味において現在に属するのであるが、しかし原印象として、今この瞬間において知覚されている音ではないという意味において、核としての今に属しているものではない。そして、原印象の絶えざる過去への移行によって、記憶の位相は現在野から消失する。つまり、原印象を中心として過去把持、未来把持によって構成される現在野には限界があり、われわれは絶えず過去へと移行してゆく印象を無限に把握しつづけることはできず、過去へと後退する印象は、いずれは過去の闇の中へと消え去ってゆくのである。したがって、「原的時間野 (das originäre Zeitfeld) は、ちょうど知覚の場合と同様に、明らかに限界を有している。」⁷⁾

印象が過去把持の射程から、いにかえるならば、現在野の領域から消え去るということは、消滅してしまうことを意味するのではなく、それが現在を構成する契機ではなくなることを意味する。フッサールは、現在野に属する過去把持された記憶を第一次的記憶 (primärer Erinnerung) とし、それに対して現在野から離脱し、現在を構成しない記憶を第二次的記憶 (sekundärer Erinnerung) として、両者を区別している。原印象が、過去把持される第一次的記憶へと移行し、それがさらに現在野から離脱し、第二次的記憶へと移行するのは、時間の必然的な流れに基づくのであり、連続的である。つまり、印象のそうした過去への移行は、ある秩序を持っており、連続性を有している。それに対して、現在野から離脱した第二次的記憶を再現させることは、全く別の事態である。つまり、印象の絶えざる過去への移行は連続的であり、秩序的であるのに対して、それを再生させるのは、そのような連続性を有していない。現在野から離脱した印象を再生させるのには、印象が連続的に過去へと沈下してゆくときの秩序は必要ではなく、それは自

7) *Ibid.* S. 31.

我による自由な回想に基づくのであるといえる。⁸⁾すなわち、私はある記憶を好きなだけ何度も再生させることができるのであり、そして、『私が出来る (Ich kann)』ということは、実践的な『私が出来る』であり、『単なる表象』ではない。⁹⁾

先に述べたごとく、知覚によって与えられた原印象は、次々と過去へと移行することによって、過去把持されて、現在野 (原的時間野) を構成するがゆえに、たった今過ぎ去ったものは、次の瞬間において新しい原印象の過去への移行によって、過去把持の過去把持となる。すなわち、自我は<未来把持-原印象-過去把持-過去把持の過去把持>という一連の時間系列を統一的に把握することによって、現在野を構成しているのである。つまり、この過去把持と過去把持の過去把持を保持している原印象は、最初の過去把持されたものと、その次に過去把持されたものとともに把持する新しい原印象である。自我の世界経験は、そうした「彗星の尾」としての第一次的記憶を自らの内に蓄積し、保持する知覚によって深まってゆくのであるといつてよい。すなわち、例えば、最初の知覚によって与えられた原印象にとって、世界地平に現出するある対象が人間であったが、その原印象を過去把持において保持する次なる原印象は、マネキン人形として与えられ、さらに、最初の原印象を過去把持の過去把持として保持し、第二の原印象を過去把持として保持する第三の、それを女性の形をしたマネキン人形として与えられる原印象が与えられることによって、すなわち、一連の知覚的所与の連なりによって、世界経験がこのように修正され、深まってゆくのである。

時間を構成するものは、意識の流れであり、「それは絶対的主観性 (die absolute Subjektivität) であり、そして比喩的に『流れ (Fluß)』として形容され、顕在性の時点、根源的源泉点である『今』の時点に発現するものの有する諸々の絶対的特性を備えている」¹⁰⁾のである。

8) *Ibid.* S. 48.

9) *Ibid.* S. 42.

10) *Ibid.* S. 75.

こうした構成された個体的客観や個体的過程ではない、構成する主観性に対する「名称を我々は持っていない」¹¹⁾と、フッサールはいう。絶対的主観性は、「絶対的無時間的意識」¹²⁾であり、そこにおいて諸々の時間的客観が構成されうる「流れの形式的構造、流れという形式」¹³⁾でしかなく、何らかの内容によって充実されることによりはじめて時間となりうるのである。すなわち、絶対的主観としてのこの流れという形式において、志向的に客観的時間性が構成されることによってはじめて、時間的な前後関係が構成されるのであり、つまり内容を有することによって、はじめて時間となることができるのである。

そして、この流れという形式的構造において、二つの志向性の絡まりあいによってはじめて時間的客観が構成され、絶対的主観性としての意識の流れが時間性を産出するのである。すなわち、原印象と、過去へと移行しつつなお現在野を構成している過去把持とを統一的に把握することによって、ある統一的な時間客観を構成する志向を横の志向 (Quer-Intentionalität) という。すなわち、先の例を再び用いるならば、最初の前印象として与えられたものが人間の姿であり、その印象を過去把持しつつ、知覚しているのは実はマネキン人形であるという第二の前印象が与えられ、さらにその印象を過去把持し、最初の印象を過去把持の過去把持として保持しつつ、そのマネキン人形は女性に象られたマネキン人形であるという、第三の前印象が与えられる際に、そうした三つの印象を同一の対象についての印象の系列として統一することにおいて、時間客観が構成されるのである。それに対して、縦の志向性 (Längsintentionalität) によって、横の志向によって構成された時間客観が、流れの形式的構造の中で時間的に配列される。すなわち、諸々の志向性によって統一的に把握された時間客観が、時間的な前後関係という縦の系列において配列され、それ以前のものとして構成された時間客観との間

11) ebenda.

12) *Ibid.* S. 112.

13) *Ibid.* S. 114.

の時間的前後関係の枠組みの中で配列されるのである。つまり、縦の志向性によって、時間的な前後関係という関係性が形成されるのであるとってよい。したがって、「一方（横の志向性）によって内在的時間が、すなわちそこにおいて持続的存在の持続や変化を包み込む真の時間である客観的時間（objektive Zeit）が構成され、他方（縦の志向性）において、…擬似的時間配列（die quasi-zeitliche Einordnung）が構成される。」¹⁴⁾

(1-3)

われわれは既にフッサールの時間論を粗描したのであるが、以上述べたごとく、フッサールの時間論は現在に大きなウエイトが置かれている、ということは否定し難い事実である。それゆえに、次に今まで述べたことを踏まえて、再びフッサールの時間論での現在についてさらに考えてみたい。フッサールにとっての、一連の時間系列である〈未来把持-原印象-過去把持-過去把持の過去把持〉の端緒である今、すなわち原印象が与えられる今は、既に述べたごとく、「観念的限界」であり、「抽象物」でしかなく、それとの連関を保っている過去把持や未来把持との関係の中においてはじめて位置付けられうるものにほかならない。すなわち、われわれは限界点としての今を指定することはできないのであり、過去把持において、すなわち今の変様としての、今との関連において一連の時間客観を構成している過去把持において、あるいはその裏返しとしての未来把持において、それらとの関連の枠組みにおいて今を規定するしかないのである。したがって、今は、広い意味での現在と同義ではないのであり、今と関連して、それとの相関において現在を構成している過去把持や未来把持の統一態において、現在について述べることができるのである。したがって、現在とは、絶対的主観の意識の流れではなく、意識の志向性によって構成された一連の連関性を有する時間客観である。既に述べたごとく、二つの志向性によって、時間客観が構成され、それが前後の関連性の中で位置付けられるのであるが、そうした意識の志向性に

14) *Ibid.* S. 83.

よって構成された連関がフッサールのいう時間であり、したがって現在とは意識の絶対的な流れの上に構成された時間客観が、われわれによって把握された射程をいうのであるがゆえに、現在の幅を客観的に測定する測定器（時計）によって規定することはできないのである。つまり、現在とは何秒間あるいは何分間であるということは言えないのであり、自我が、意識の流れの上に構成している時間客観を、把握している幅を現在というのである。

それでは、そうした時間性に基づく世界経験とはどのようなものであろうか。時間性に基づく世界経験の端緒は、既に述べたように、知覚による原印象が与えられることにはほかならないのであるが、それだけでは世界経験は成立しえない。自我の能作が、原印象の流れの中で、一連の時間客観を構成する限りにおいて、そしてそれを意識の流れの中で疑似時間性として配列する限りにおいて、世界経験は成立しうるのである。すなわち、自我が意識の受動的な流れにおいて、原印象の連続する束を統握し、構成することにおいて、すなわち時間客観を意識の中に構成することにおいて、世界経験は為されるといってよい。意識の流れにおいて、多様な射映が現出するのであるが、それを統握して、同一の時間客観として構成することによって、時間的に持続する対象の統一的な像が構成されるのであり、いい換えるならば、世界が現在化されて、現在野の射程において現出するのであるといえる。すなわち、「現出する事物が構成されるのは、根源的な流れの中で、感覺的統一と統一的統握 (Empfindungseinheiten und einheitliche Auffassungen) が構成されるが故である。」¹⁵⁾つまり、原印象によって端緒付けられた、世界の自我への巻き込みは、必然的に過去へと移行し、変様を蒙るわけであるが、そうした流れを同一の事物として統握して、時間客観として構成する中で、世界経験が為されるのである。すなわち、世界経験は、現前野の構成に有るといってよい。自我の世界への現前を構成するのは、志向性による時間客観の構成であるが、それによって自我が統握する現前野が構成されるわけであり、つまり自我が面している世界が経験されるわけである。

15) *Ibid.* S. 92.

(1-4)

晩年のフッサールは、『内的時間意識の現象学』において述べられた構成された時間客観に基づいて、それを構成する自我の能作の分析に専念する。しかし、その大部分がまだ未公開の遺稿なので、われわれはフッサールが執筆した原稿に基づいてそれを論ずることは不可能である。それゆえに、そうした未公開の遺稿に基づいて書かれた、彼の時間論についての研究書、クラウス・ヘルトの『生き生きした現在 (*Lebendige Gegenwart*)』に基づいて、フッサールの晩年の時間論について考えてみたい。

ヘルトによると、晩年のフッサールは、「世界を経験する生」の過去地平と未来地平を括弧に入れて、作動する自我、現在化する自我に焦点を当てる。¹⁶⁾ すなわち、過去把持や未来把持を産み出す、時間論の根源としての作動する自我、すなわち「生き生きした現在」として有る自我の様態を考察することによって、いかにしてそうした時間客観が構成されるか、を見るのである。つまり、そうした作動する生き生きした現在として有る自我によって産出された過去把持や未来把持は、フッサールの考察の射程の外に置かれて、そうした過去把持、未来把持の系列としての時間客観を産み出す根源としての、現在化する自我、時間化する自我へと遡及するのである。そうした作動する自我は、時間客観の根源であるがゆえに、もはやそれ自身、時間的な存在ではなく、「原初的、原様態的、あるいは先時間的現在 (*urtümliche, urmodale oder vor-zeitliche Gegenwart*)」¹⁷⁾ と呼ばれている。このような、作動する生き生きした現在としての有り方をする自我への遡及は、過去や未来を産み出す根源への遡及であるがゆえに、時間客観としての過去や未来を根源的に構成することを照射する。すなわち、先時間的なものとしてのこの絶対的自我は、自己を時間化することによって、つまり過去把持、未来把持を産出することによって、自らを時間的存在として構成するのである。すなわち、「自我極 (*Ichpol*) は、活動や触発等々の担い手<として>、基体<と

16) Held : *op. cit.* S. 62.

17) *Ibid.* S. 63.

して>存在するのではなく、まさに自我であり、放射する極 (Strahlungspol), 触発にとっての機能中心 (Funktionszentrum für Affektionen) であり、放射する極 (Ausstrahlungspol) であり、活動性 (Tätigkeiten), 作用の活動性の中心 (Tätigkeitszentrum) である。」¹⁸⁾ 過去地平や未来地平を括弧に入れることによって獲得されたこの作用の中心としての自我極が、時間化の根源であり、そこから、時間客観としての、<未来把持-原印象-過去把持-過去把持の過去把持>という一連の時間系列が構成されるのであり、それらは機能中心としての自我極から放射されるのであるとあってよい。すなわち、自我の根源的能作によって、時間客観は構成されるのである。

そして、先反省的な根源的な転化 (urwandel), つまり意識の根源的に流れることは、そうした自我の能作以前の自我の様態であるがゆえに、原受動的 (urpassiv) と呼ばれる。つまり、自我が自らを反省的に捉えることによる、自我の内への時間客観の構成は、この先反省的な原受動的な流れに基づいているのであり、この意識の根源的転化としての流れを時間化すること、現在化することによって為されるのである。

この原受動性としての意識の流れは、自我の機能であるというよりも、自我の様態であり、自我は自らが能動的に作用する以前に、一つの流れである、ということである。それは、したがって、自我の能動的な作用ではなくて、自我が蒙る様態にほかならない。自我の作用は、今まで述べてきたごとく、そうした先時間的な流れに基づいて、時間客観を構成することである。そして、その時間客観を構成する自我の能作それ自身も、時間客観の根拠であるという意味において、先時間的なものである、ということができる。フッサールはこの受動性と、自我の能動性との関連について、遺稿で次のように述べている。

「受動性ということが意味しているのは、自我が目覚めていようと、そして活動している自我であろうと、自我の活動なしに流れが生ずる<ということ>である。——流れ<ここでは流れること (Strömen) と同じ>は、自我

18) Ms. E. III2, S.. 28. (1920). Held. *Lebendige Gegenwart* の引用から

の活動に基づくのではない。それが自我の活動に基づくと考えることは、自我が流れることと〈活動〉を実現することへと向けられているかの如く、そして自我が自らを実現するのは、一つの活動に基づいてであるかの如くである。』¹⁹⁾

つまり、意識の流れは、自我の能作ではないのであり、自我はそうした自我にとって受動的な流れを反省的に捉えて、それを時間客観として、前後関係の枠組みの中に位置付けるのである。すなわち、フッサールは、以上の考察では、意識の流れを、自我にとって受動的なものとして考えており、自我の積極的な能作とは考えていない。しかし、フッサール（あるいはヘルト）の、この〈流れること〉についての見解は必ずしも一貫性をもってはいないように思われる。例えば、「自己反省の可能性は、究極的に作動する自我の絶えず流れることに基づくと共に、流れる立ちとどまり性（strömenden Ständigkeit）に基づくことによって成り立っている」²⁰⁾といった文章（これはフッサールの文章ではなくヘルトの文章であるが）を見ると、フッサール（あるいはヘルト）は、流れることを必ずしも受動的な自我の様態とは見ておらず、自我の能動的な作用に属するものと考えている時期もあった、ということが分かる。

フッサールは遺稿において、生き生きした現在としての自我の根源的な有り方を、〈流れる立ちとどまり性〉として定式化する。すなわち、「その都度性-において-存続しているものとしての自我は、それはそれで、再び生き生きした機能現在の立ちとどまることと流れることの根源的統一によって合一される。」²¹⁾ すなわち、根源的自我の能作は、流れること、つまり自我にとって原受動的な自我の様態に基づき、そこにおいて、立ちとどまることによって、自我の内に時間客観を構成するのである。フッサールは、遺稿において次のように述べている。

19) Ms. C17IV. S. 1ff. (1930). 同じく Held の引用から

20) Held : *op. cit.* S. 81.

21) *Ibid.* S. 91.

「私は絶えず活動しつつある。そして私のすべての活動と、活動に関わる作動<=反省すること>とを貫いて同一の自我である。その自我はすべての能作を保持している自我である。—絶えず自己時間化 (Selbstzeitigung) と存在的<=世界->時間化をすることにおいてのみ存している。——<そしてその>絶えず根源的に形成する<=根源的に構成する>自我は、次の如き機能の流れることの内にある、すなわち、流れ去りゆく変様を蒙った機能として有り、そして『なお』生き生きした機能<である>如き、そのような機能の流れることにおいてある。立ちとどまっている自我 (ständige Ich) は、絶えず根源的の源泉<であり>、また『同一化すること』によって同一なのではなくて、根源的に一体となったもの (ureinig) として同一なのであり、最も原初的な先-存在 (Vor-sein) において存在している。』²²⁾

われわれは既に、流れることについては考察を加えたのであるが、それではフッサールのいうこの立ちとどまり性 (ständigheit) とはどのような意味であろう。これこそが自我の根源的な能作であり、自我の原受動的な流れることに対して、能動的な作用を加え、それを時間客観へと取り纏める作用にはかならない。すなわち、『内的時間意識の現象学』において<未来把持-原印象-過去把持-過去把持の過去把持>という、時間系列が考察されたのであるが、そういった時間客観の系列へと、原受動的な流れを取り纏めて、時間性へと構成していく自我の根源的な機能が、この立ちとどまり性である、といってよいだろう。つまり、自我の流れることは、まだその様態においては、先時間的なものであり、時間性へと至っていない。それを、客観的に取り纏めて、時間客観を構成することによって、時間的前後関係の枠組みの連関へと捉え直す機能が、この立ちとどまり性である。

(2-1)

我々はフッサールの時間論について、概略的に考察したのであるが、次に、このフッサールの時間論批判から出発して、独自の哲学を打ち建てたジャッ

22) Ms. Av5. S. 5. (1933). 同じく Held の引用から

ク・デリダの時間論について述べよう。デリダは、ヨーロッパの哲学の歴史を、ハイデッガーが為したごとく、総括する。ハイデッガーは、ヨーロッパの思惟の歴史を存在忘却の歴史として捉えたのであるが、デリダは、現前の形而上学、ロゴス中心の哲学、パロール中心の哲学として捉える。そして、そうしたヨーロッパの思惟の脱構築 (déconstruction) を為すことを試みる。その出発点が、フッサール批判であるといってよい。デリダは、初期の著書『声と現象 (*La voix et le phénomène*)』において、フッサールの時間論を批判するのであるが、その出発点として、デリダは、フッサールの『論理学研究 (*Logische Untersuchungen*)』第二巻の一「表現と意味」の各章を検討することから始める。フッサールは、「表現と意味」において、記号の概念を表現 (Ausdruck) と、指標 (Anzeichen) とに区別する。指標と表現という記号の機能の違いはどこに有るのか。指標とは、因果的連関についてであろうと、論理的連関についてであろうと、慣習的な連関についてであろうと、心理的な連関についてであろうと、とにかく、何かについて伝達すること、通知すること、告知すること、にその機能を有する記号の作用である。それに対して、表現 (それをデリダは *vouloir-dire* と訳す) の機能は、そうした指標の機能とは反対の作用、すなわち「表現と意義作用の純粹な機能は、伝達すること、通知すること、告知すること、すなわち、指標することではない。」²³⁾そして、そうした表現としての機能が端的に現れるのは、内面的な独白においてである、とフッサールは、『論理学研究』の中で述べている。なぜならば、内面的独白において、私は私自身に端的に現前しているがゆえに、私は私に対して何事も伝達したり、通知したりする必要はないのである。私の私自身への現前において、私が私に何事かを通告すること、すなわち記号を用いることは、必要ないのであり、そうした場合は記号とは無縁の場である、ということが出来る。そして、私の私自身への現前において、記号を代理として私が私自身に何かを告げ知らせる必要がないためには、「時間的現

23) Jacques. Derrida : *La voix et le phénomène*, Presses Universitaires de France, Paris, 1967, p. 53.

在の不可分割的な統一性 (l'unité indivise d'un présent temporel) において生ずるのでなければならぬ。²⁴⁾ すなわち、私の私自身への現前という孤独な独白においては、指標という代理によって何かを告げる理由がないのであり、そして、目的がないからであり、そして、「内面的伝達のこの無目的性 (Zwecklosigkeit)、これが自己への現前 (présence à soi) としての現前の同一性における無-他性 (non-altérité)、無-差異 (non-différence) である。²⁵⁾ すなわち、私の私への現前としての現在、この指標という代理によって媒介されない場としてのこの現在は、不可分でなければならない、そこには何らかの他性、差異が有ってはならないのである。つまり、私の私への現前としての現在において、私は私自身に、記号という代理を媒介として何かを告知する必要がないためには、私の私自身への現前としての現在が、他性によって差異化されてはならないのであり、私の私自身への現前としての現在とは異質な何かがある所に介在してはならないのである。

しかしながら、デリダは、フッサールの時間論における現在が、この不可分割的な統一を維持していないことを指摘することによって、フッサールの論点の瓦解を目指そうとする。すなわち、フッサールは、「≪源泉-点 (point-source)≫としての今の同一性 (l'identité à soi) から出発して」²⁶⁾ 時間を考えており、その意味において、フッサールは現在に絶対的優位を置いている。そして、「この優位は現前のギリシャ的形而上学を、自己意識としての現前の『近代的』形而上学へ、表象 (Vorstellung) としての観念の形而上学へと継続させる伝統を保証している。²⁷⁾ しかしながら、『内的時間意識の現象学』において、われわれが既に考察したごとく、時間系列の端緒としての原印象を与えるものとしての知覚には、既に非知覚的なものが、すなわち、非現在のものが侵入している。すなわち、フッサールのいう現在を構成するのは、原印象のみではなく、その過去への移行としての過去把持、

24) *Ibid.* p. 67.

25) *Ibid.* p. 68.

26) *Ibid.* p. 69.

27) *Ibid.* p. 70.

あるいはその裏返しとしての未来把持という時間客観の系列，すなわち非知覚的なものである。すなわち，源泉-点としての今と，非知覚的な過去把持，未来把持が連結することによって，現在が構成されているのであり，そうであるならば，フッサールの主張する私の私への現前としての不可分割的な自己同一性である現在は瓦解するということになる。

「するとひとは次のことに気づく，すなわち，知覚された現在の現在性 (la présence du présent perçu) は，それがあつた非-現在性と非-知覚，すなわち過去把持と未来把持 (rétention et protention) と連続的に構成する限りにおいて，そのように現れるのである。これらの非-知覚は，顕在的に知覚される今に，場合によっては付け加わり，随伴するのではなくて，それらは不可避的にそして本質的に，今の可能性に加担しているのである。」²⁸⁾

すなわち，私の私への現前としての生き生きした現在は，非知覚，つまり私の私への現前ではないものとの連結においてのみその形態を維持しているのであり，その意味において，私の私への現前の不可分割的な統一は破壊されているのである，とデリダはいう。

デリダは，そうしたフッサールの誤りは，記号の果たす役割を見誤ったところにあると考える。すなわち，デリダは，記号のイデア性は，記号の反復可能性に有るとする。

「しかし，同一のものの恒常性の名前でしかなく，またその反復の可能性でしかないこのイデア性は，世界の内に存在せず，それは別の世界からやって来るのでもない。それは反復の行為の可能性に前面的に依存する。イデア性は，反復可能性によって構成される。」²⁹⁾

つまり，デリダは，フッサールの意味のイデア性，すなわちシニフィエ (所記) のイデア性に代わつて，シニフィアン (能記) の感性的イデア性を主張するのである。記号のもつ反復可能性としてのイデア性は，意味のイデア性ではなくて，記号の感性的側面の有するイデア性にほかならない。つまり，

28) *Ibid.* p. 72.

29) *Ibid.* p. 58.

記号を何度も反復しても、常に同一の意味との相関性を維持する限りにおいて、それはイデア的である。そして、記号の無限反復可能性を開いてくれるものは、「時間性の源泉としての生き生きした現在、《源泉-点 (point-source) としての今》³⁰⁾である。つまり、存在の普遍的形式であり、あらゆる体験の普遍的形式である現在においてのみ、シニフィアンとしての記号のイデア性が保証されるのである。そして、言語主体の言表には、言表されたことについての表象 (représentation) を有することなしには、言語作用を行うことはできない。つまり、言表すること (discours) は、言表することについての表象<ルプレザンタション=代理>であり、また自己についての表象<ルプレザンタション=代理>にほかならない。フッサールが見落としたのは、記号のこの反復可能性と代理可能性にほかならないのであり、どのような知覚においてもそうした記号の本性が侵入しているのである、とデリダはいう。

「おそらくフッサールは過去把持の必然性と記号の必然性を同一視することを拒否するだろう、というのは記号のみが心象と同時に、表-象 (représentation) と象徴の部類に属するが故に。そしてフッサールは、現象学の公理的原理 (principlum axiomatique) を問題にしない限り、この厳密な区別を断念することはできない。過去把持と未来把持は、根源性の領域というものを《広い意味》に理解する限りにおいて、この領域に属すると、彼が強く主張していること、第一次的記憶の絶対的価値を第二次的記憶の相対的価値に執拗に対立させていること、こういったことは彼の意図と不安とをよく表している。」³¹⁾

すなわち、過去把持は、記号の表-象<再-現前=代理>にその起源をもつのであり、知覚において常にその代理としての記号が侵入しているがゆえに、現在が過去把持を含むのである。つまり、フッサールの時間論の図式である<未来把持-原印象-過去把持>は、デリダにおいては、<知覚-知覚の代理 (表象)>といった図式へと転化するものであり、現在という形式がその

30) *Ibid.* p. 59.

31) *Ibid.* p. 74f.

代理としての記号によって無限に反復されうるし、同一のものの再来として無限に反復されうるがゆえに、現在が有すべき不可分割的自己同一性が崩れ去るのである、ということになる。つまり、存在の普遍的形式であり、あらゆる体験がそこにおいて可能な普遍的形式としての現在が無限に反復されうること、そのことは過去保持という形態をとって把握されるのであるが、それは現在において為される言表による記号が、現在の代理として、現在を無限に反復するがゆえであり、現在を無限に再来せしめるがゆえである。

(2-2)

デリダは記号と主体との関係について別の側面からの説明を試みている。すなわち、私の私への現前のヴァリエーションとしての、〈私は私が話すのを聞く〉という事態である。

「私が話すときに、この作用の現象学的本質には、私が話すときにおいて私を聞く (Je m'entende dans le temps que je parle) ということが属している。」³²⁾

〈私は私が話すのを聞く〉という特異なこの自己関係の様態は、フッサールの『論理学研究』に見られるものであるが、デリダが、音声中心主義の象徴として、好んで用いるものである。〈私は私が話すのを聞く〉場面において、私が語ることによって生気付けられた能記は、私に絶対的に現前している。それは、〈私の私への現前〉から分離しないように思われる。すなわち、〈私は私が話すのを聞く〉場面において、音声的記号は、私への絶対的近さにおいて、私によって聞かれる。私という主観は、私の外を媒介することなく、私の言語活動によって触発されるがゆえに、それは〈自己-触発 (auto-affection)〉である。

「〈私が話すのを聞く〉という作用は、絶対的に独自の型の自己-触発である。」³³⁾

32) *Ibid.* p. 87.

33) *Ibid.* p. 88.

しかし、そうした純粋な内面性としての、〈私は私が話すのを聞く〉という事態は、つまり純粋な自己-触発は、「ある純粋な差異が自己への現前を分裂させに来ることを予想したのである。」³⁴⁾時間化の運動が産出される出発点がこの自己-触発であり、それは純粋な産出である。時間は、純粋な自己触発にその端緒をもつものである、という考えは、フッサールの時間論の一変様であるといえよう。フッサールのいう自己発生的発生 (genesis spontanea) が生ずるためには、すなわち、自己発生的発生によって産出された今がひとつの今であるためには、その今が別の今との差異において自己を保っていなければならない、別の今を把握し、別の今によって自己触発されなければならない。すなわち、純粋な自己触発であり、生き生きとした現在における自己への現前は、自己同一性を維持しているかの観を呈するのであるが、しかし、「生き生きした現在は、自己との非-同一性と、過去把持的痕跡 (la trace rétentionnelle) の可能性から湧き出る」³⁵⁾のである。すなわち、生き生きした現在は、常にその痕跡としてしか自らを現さないものである。したがって、外面性を通過しない、自己から自己への回路としての純粋な内面性などは存在しないのであり、生き生きした現在は、外面性、つまり非-自己同一性に晒されており、常に外部へと開かれており、空間化 (espacement) において有るのにほかならない。すなわち、〈私は私が話すのを聞く〉という内面性の事態は、デリダによるならば、外面性によって侵略されているのであり、自己への現前としての自己関係には、外面性という亀裂が入っているのである。

(2-3)

既にわれわれは、フッサールのいう〈私の私への現前〉という不可分割的な自己同一的現在の内に、亀裂が介在しており、決して自己同一性を保ってはいないこと、そしてそれは記号の無限反復性、代理的機能にその根源をも

34) *Ibid.* p. 92.35) *Ibid.* p. 95.

つのであるということ、デリダに即して見てきたのであるが、そのことが、時間性への空間性の侵入という事態なのである。そして、そうした事態を引き起こすものをデリダは、差延 (différance) という。差延とは、「現前に分裂と遅延に同時に服従せしめることによって、現前に亀裂を生ぜしめると同時に、遅らせるという」³⁶⁾働きである。すなわち、存在は常に差延されたかたちで与えられるのであり、現前が現前としてそのまま与えられるのではないのである。差延が現前に亀裂を与えて分節すること、すなわちフッサールの時間論に即していうならば、不可分割的であるべき〈私の私への現前〉に亀裂を生ぜしめ、それを〈未来把持-原印象-過去把持-過去把持の過去把持〉という時間系列へと分節せしめると、現前を遅らせること、つまり常に現前の代理を介してしか現前が与えられないこと、というこの二つの事態は、同じ事態の二つの側面であって、決して異なった差延の作用なのではないのである。したがって、有るということ、つまり与えられて有るということは、常に遅れて有るということであり、現前が現前として有ること、あるいは与えられているということではなくて、差延による代理 (表象) によって与えられているということにはかならない。そして、痕跡とは、決してそのままのかたちでは与えられることのない現前の痕跡であり、現前の差延されて与えられた存在のことを意味するのである、といてよい。

「根源的現前の明証性を絶対的に再生させることのこの不可能性は、それ故に我々を絶対的過去へと差し向ける。だから、現在の単純性の中に要約されないものを痕跡と呼ぶことは、我々を正当化した。」³⁷⁾

「他方、痕跡が絶対的な過去を指し示すということは、それが我々に、変容された現前というような形では、つまり過ぎ去った-現在 (un présent-passé) としては、もはや理解しえないような過去を思惟することを我々に強制する

36) *Ibid.* p. 98.

37) Jacqu. Derrida : *De la grammatologie*, Les Edition de Minuit, Paris, 1967, p. 97.

邦訳『根源の彼方に グラマトロジーについて 上』足立和浩訳、現代思潮社、136ページ

ということである。」³⁸⁾

痕跡は過ぎ去った現在を指し示すのではなく、過去とはかつて現在であった過去ではないことは、痕跡が指し示す過去は、一度も現在であったことのない過去であり、したがって、かつて現在であった過去ではないのである。デリダによれば、現前は決して現前として与えられるのではなくて、すなわち、無媒介的な知覚によって与えられるのではなくて、それは常に差延によって、遅れたものとして到来するのであり、痕跡として与えられるのである。既に述べたように、フッサールのいう現在は、不可分割的な自己同一性を維持しているのではなくて、それ自身の内にある他性、非自己同一的なものを介在させているのであり、すなわち、原印象に対する過去把持であり未来把持である。つまり、時間的現在は、この非同一的な過去把持や未来把持によってその存立が可能なのであり、つまり、現在は常に痕跡なのである。差延作用は、不可分割的な自己同一性であるはずの現在を、常に非自己同一的なものへと差異化し、自己とは他なるものを介在させることによって、現在を非同一的な他なるものとしての過去から到来せしめるようにする作用、つまり現在を遅延させる作用である。つまり、そこには記号作用が介在しているのであり、記号作用は、現在の有する諸要素が、それ以外の要素、現在にとっての他性としての要素へと関連し、それ自身の内に過去の要素を保持するという事態を生ぜしめているのである。現在は、そうした差延作用によって遅延されているがゆえに、既に過去であり、痕跡にはかならないのである。すなわち、現在の間隔化、すなわち、時間の空間化であり、空間の時間化である。

「ダイナミックに自己を構成し、自己を分割するこの間隔 (cet intervalle)、これが人が間隔化 (espacement)、時間が空間となること、あるいは空間が時間となること、〈待機 (temporisation)〉とよぶうものである。」³⁹⁾

38) ebenda, 邦訳, 同書136p. f.

39) Jacque. Derrida : *La Différance* in “*Marge de la philosophie*” Les Editions de Minuit, Paris, 1972, p. 13f.

すなわち、差延とは、時間の空間化であり、空間の時間化である、とデリダはいう。先に述べた〈私の私への現前〉としての純粹に内面的な時間作用には、既に非自己同一的要素が孕んでおり、空間的要素が侵入しているのである。つまり、既に現在がそれ自身において分割されているのであり、原印象が過去把持へと送られているのである。したがって、時間の内に非自己同一性が侵入し、時間が間隔化されること、差異化されることによって、時間が時間として成立するのである。つまり、差延作用が時間を時間として可能ならしめるのである。したがって、まず自己同一的不可分割的な時間があって、それが差延作用によって間隔化されるのではなくて、差延作用によって、他性、非自己同一性を孕む時間が生起するのであるとあってよい。つまり、時間化の出発点において、時間は自らの内に非自己同一性を孕んでいたのである。

(3)

以上、フッサールとデリダの時間論を概略したのであるが、両者の時間論は、デリダがその哲学的出発点をフッサール批判にもっているとはいえ、非常に異なるということが分かる。フッサールの場合、問題であるのは、世界と関わる意識の志向性の分析であり、意識、あるいは自我が世界を構成する際に、つねに時間性が介在しているという観点から時間性分析、あるいは時間意識の分析を行ったのである。そして、晩年のフッサールは、そうした時間意識の根源まで遡及して、時間意識を成り立たしめる根源としての自我の根源的発動である生き生きした現在にまで至ったのである。あらゆる認識、あらゆる判断（フッサールはそれを否定しているが）は時間性であり、その時間性はフッサールにとっては現在としての時間であった。デリダがフッサールを批判する場合に問題としたのは、この現在中心主義的な時間観であり、それは西欧形而上学のいわば象徴にはかならなかつたのである。デリダはフッサールをいわば脱構築して、きわめて奇妙な時間論を述べる。それは既に述べたごとき、差延としての時間であるが、差延としての時間は、フッ

サールの時間論批判を手掛かりにして構築されたにもかかわらず、フッサールの時間意識としての時間ではないところに、フッサール時間論と大きく異なるところがある。すなわち、デリダにおいて、差延を為す時間的主體、あるいは時間を遂行する主體は存在しないのであり、いってみれば、誰でもがその主體であるが、誰もその主體でない、主體なき時間論である。無限の、そして無数の言語行為の産出、その蓄積が差延作用を生ぜしめるのであり、したがって、フッサールの自我中心的時間は、デリダにおいては、非自我的時間論として、無限に拡散するのであるといつてよい。